

## 筒井友弥

このところ、深夜までの仕事が増えた。研究室を出て、静寂で仄暗いキャンバスを抜け正門に向かう。このとき、私はいつも同じ光景を思い出す。

二〇〇二年、京都外国语大学修士課程の学生であつた私は、当時はまだ京都外大に博士課程が設置されていなかつたため、師事していた乙政潤先生の紹介で、広島大学博士課程後期への進学を決意した。同年十二月、広島大学大学院社会科学研究科（現総合科学研究科）の吉田光演先生にご挨拶すべく、東広島市の西条駅に降り立つ。初の地だ。交通手段を間違えて迷つてはならないとタクシーに乗りこみ、運転手に「広島大学まで」と告げた。すると、「東千田？」と尋ね、こに尋ねられ、よくわからず「あ、はい」と答えた私に、運転手はなぜかつまらなそうに「何口？」と尋ね、これまでよくわからず「総合科学部に」と伝えると、「ああ、西口ね」と車を発進させた。広島大学は、一九八

年の多目的ホールが建ち、併設された宿泊施設の一階には、フレンチレストランが一般に開放されている。キャンパス周辺のバス停は九箇所に及び、運転手が「西口」と言っていたのはその一つである。広島大学は、「広大（ひろだい）」と呼ばれるが、まさにその名の通り、まるで広大なアミューズメントパークであった。

私は広島大学大学院に六年間在籍した。修了前の二年間に与えられた院生研究室は広さ約十四畳で、貴重な文献が揃った本棚のほかに、冷暖房のみならず、冷蔵庫、テレビ、ソファーガ完備されていた（冷蔵庫とテレビは先輩方からの寄付として引き継ぐ）。私は、そこに一人で（暮らし）ていた。研究棟への立ち入りは、カードキーを兼ねた学生証で管理されていたため、昼夜を問わず、深夜に及ぶ在室も可能で、ときにはソファで寝泊まりすることもあった。夜十時頃までであれば正面入口が開錠されていたため、近くの弁当屋に電話で注文をすると、直接研究室までほつかほかの弁当を運んでもくれた。そうして私は、四六時中、学業に没頭することができた。日なか、集中が切れて作業が滞ると、気分転換に（パーク）を散策し、四季折々の

二年の工学部移転を皮切りに、一九九五年、西条から約三十キロ離れた広島市東千田キャンバスからの移転を完了した。当時の私には、運転手の最初の問い合わせ、ちょっとしたウエルカムジョークだったなど知る由もない。タクシーは、町の幹線道路である通称ブルバールを快走し、まもなくして、眼前に「広島大学」の文字が浮き出た巨大な煙突が見えてきた。（着いたあと安堵して降りる準備に取りかかると、まさに大学は目の前という交差点で、運転手は左ワインカーを出した。少し訝しく思いながら黙つていると、左折した車は結構な距離を走り続けた。（ぼつたくり？）と嫌疑を抱きつつ、遠く離れゆく煙突の名残を惜しんでいたと、タクシーは徐々に減速したあと、さらに敷地内部へと突き進み、ようやく「着いたよ」と停車した。

私にとって、広島大学の最初の印象は、ただただ異次元の空間であった。車やバイクが敷地内を堂々と走行し、渓流や湿地帯、ビオトープが、キャンバスほぼ中央の「ぶどう池」と呼ばれる巨大な池に併存する。周辺では様々な植物が観察され、多くの昆虫や魚、野鳥が生息している。池の岸辺には、一千人を収容でき

草花や風に癒しを求める。今振り返れば、これほど満たされた学生生活は、私の人生の宝にはかならない。二〇〇六年から三年間、松山大学の松尾博先生と、広大時代のかけがえのない先輩である田中雅敏さんのお力添えで、松山大学での非常勤職に就かせていただいた。自宅から、車、鉄道、フェリー、バス、市電を乗り継ぐ往復七時間の通勤を経て、西条に帰り着く頃には日付が変わっていた。それでも、道中決まって牛井屋で夜食を買い、院生室に向かった。そうして私は、A棟四階の一室で、「学問は最高の遊びである」という広島大学のキャッチコピーをはきちがえていた。帰宅しようと研究室を出て、静寂で仄暗いキャンバスを抜け駐車場に向かう。なげなしの賃金で購入した中古の軽自動車が、広漠な駐車場にぽつんと控えている。この光景を思い出し、私はいつも自省する。最近増えた深夜までの仕事は、満喫しすぎた広島大学でのツケが回ってきたせいだろう。とは言いつつ、今秋の母校での学会に、研究発表の応募すらせす、いけしやあしゃあと煙突眺め見ようと、私は巨大パーク再訪の機会に心躍らせていく。

（京都外国语大学准教授）